『Graphic Art & Design Annual
10〜11』
厚論のためのインタビュー言葉より
「感覚を研ぎ澄ませ」
2011年5月、ニューヨーク
提供：公益財団法人 DNP文化振興財団

私のモットウは「ちょっと逆から攻めるっていんですよ。つまりサーベイしてね、大変とか同じを並ぶとかをしちゃうんだよ。だから、私はどう作っていったらいいのかっていうことから入るわけですよね。だけどそれが、まず、誰と（自分の）芸術作の、100%誰況をすとは思わないけれども、芸術性の誠見度と、それから大衆が喜ぶ力量からいうと、合体、誰ようこういうことになるわけ。だから、自分の中に、大衆が喜びそうな表現のなにそういう要素は十分に持ってると思うし、それはビュアにそのエッセンスを取り出して考えると、実用やそこにいっちゃうのね。そんなにアルファルもんじゃないんですよね。

だからあの一なんていうのか、まあ再びアートい大変な概念で使うと疑びたって感じね。アートとかグラフィックっていうことは、実際グラフィックデザインっていうのは、今まで作ってきたグラフィックデザインっていうのはこれいいのか、この工夫いったらう消滅するとか、じゃあどうやったら消滅しないでいいのか、つまりグラフィックデザインというものを、もう一回デザイナー自身が振り下げて考えないと、時代の変化についてただこうやってコンサーセーションにだけは、必ずそれはかっと狩源していきますね。何に接れてこずディーンになるのかっていうことです。私はそのままグラフィックデザインでもイメジストリアルデザインでもなんでも、デザインデザインっていっていうものを見てみるとなんかアルファ文化っていう、表現的にさきれいなだけで中身は空っぽ感みたいに見えるんですよ。

じゃあどうどうだに言い物っていうのは、デザイナーは使えないわけ？っていう。つまり何にも中身がなければ一ちょうちょうの中身がないからだと思わないでしょ。ただきれいなものをワルフルピカピカやってデザインしゅーデンのようなことを見れたりもの工場の流動とはなりないと思う。だからもう今私が考えるのは、ずっとそうだったんだけど、グラフィックデザイン、インダストリアルデザイナー、アーキテクト、あるいはインテリアデザイナーそのパンクダーは なにもしようが出ると思う。ある意味ではサーとよりに能力が上がっていくということ。

それでも、結婚と知識というものなるのをひっくるめて新しいものを一年間新しいものをやっていくっていうのは全く嘘と思う。だからもっと等身大の仕事になって社会を変えられるくらいの一社会を調節さるような仕事っていうスケールのものは、やっぱりそれをやってくれていう人間がいて、条件をそろえて、そして弱気ではやらないと。おちいのそういった切磨摩のあるから歴史の中に成りとってきてるんですよね。やはりなってこようとこれ思うんだ。だからもうはるか気伝いに近い精神構造を持っていうことは、周り見渡してなんなと他やっていうのをやってこようとメタルスケンテ見る。ある意味ではもっと自分の中に、大衆が喜ぶ、自分が思ってそもそもうそいう仕事がはたしょうがないのかなって、映画なんかやっぱり面白いですよね。やはり、ちょうエキサイティングよ。

一人の思だけじゃなくて、音楽家の題だ、歴史家の題だ、演出家はとうも、クロイ（ハ）ウスにいるパトリデザイナー、それから、パフォーマー、アクター、というのがね、パラパラなことってさまざまで周囲まで一緒にパッと和題のとこ見るのかって、ってこの問題次々作られていっていう。もうなっていうかな、そういうものがあってやっぱり自分自分以上のものが表現がさまざまっていってことがあるわけで。だから自分の中にそれ、ちょっと、ちょっとこれ見せて、これいろんたちからさ「これどうするおれどう？」…そういうことによって刺激されて、「あぁそうか、じゃあこれだったらどう？」って言ってくれるんだ。

ちょっと、

最初に自分が考えているようなものから浮ねれて見つめるって、「何を見つめればいいの？」っていっちゃうから（笑）だで自分がこれ捨ててどうしようもないっていうものにおちつのって、そこからこうう少しずつ少しずつ育っていくっていう。植物を育てるように育てていくっていうね。もうあんまり目はキョロキョロしないで、1つにもう集中して、そうすると自分がもまれてくると思うんだよね。やっぱり集中力がなくなるからわないっていうことも一つのキーでしょうね。やっぱりいろんなものが気になっちゃって、自分がやっぱり定点にっていう見ないっていう集中で同何ものかを見ようと思し、それからやっぱり今現象を打て、挑戦するべきですよね。

だから私が企画日本をやってて、こっち来たときに何の契約もなかったし、わざとそういう状況を自分が選んだんだけとも、仕事の契約はないし、おりもないし、ニューヨークに行ったらあそこで食べられるようっていうのが全くない状態。そういう地点にたどりと自分が次は本当に何をやりたいのか全く見えないっていう風に思ったんだ。じゃあそういう状況で、自分でやっぱ、どうして実現するのかなって、なぜ、どういう方法で、これは、私にとってもスケテーションなんですよ。あるっていうのは、ちょっと、やっぱ、自分の身体の中にあるから重要なものがたの見えていて、ってこうとそれがパッと出て見ること。必要なものが出てくる。まあ自からそれは変わらないと思うんだけど、例えば、2週間で生まれてきた時間の熟みの変化っていうのは、ピンとくる依頼とっていうのはほとんど無いっていう。

若い人には今急出来ないだろうっていう自自はある。自分が見てきたもの、作ってきたもの、触れたもの、いろんなものがいっぱいあるので、ま本等身が多くはなるほど豊かさ、そういうものの体験の中に取り込んでいるわけだから、そういうものはの込まれている。それから自分のもう変えたくない考え方一貫ってっていうことは、ピンとこるものだけれども、ピンとこるようなこなどの仕事をやるのの、例えばアート＆ファッションの結婚っていうのは関係ないの、っていうことを実験し続けていく。実験を続けていくっていうことは、それからやっぱり私の仕事はそれ捨てるのは。

それはっぱりも捨ては、「なるほどそうなんだ」っていうものに対しては説得力を持たないとね。で私はずっとスタイルの一番私の完ずだと思うんだけど、ミラーでスタイルっていうのを作り続けるのがっていうのはこれはスタイラスですよ。自分の身体から出てくるあるテーマとっていうものをだすとおかやっぱりずっとスタイルっていうことで、それから、私は自分の中にあるものをのなにかとかいうことを表出してっちゃうとやっぱりこの仕事を見て、「よーっ！いい仕事やってるんやの」っていうのが思うとこっちゃ嬉しいです。昨日作ったあたらに新鮮、私は本能的な人間だと思うんだけとも、本能っていうのがずっとイスタアフてとしょうかいわれた。そういうものを大切使する時間もない。（笑）、興味を持ってるんだけとも、その一本能でジャッジがってることはずっと多いと思うんですね。だから、これは正しい、これは間違ってるって、本能の部分でそこいっちゃ、人がゆらのいい部響っていうのがずっと入り込んでるっていうことこうはあると思うのね。だからだんだんとこう一ッ一ッ成型でフィアスにしてくると思うんですよね。自はなんでもどっちゃって一怖かったってことはかっが嬉しくてくるうなこういうかな、怖いものなどしっかりとっ、うっ、無くなってくるって、これもやっぱり年齢的にダウ。

私たちやっぱり、表現の志一アーティストみたいな、クリエイターみたいな一ッ言葉っていう固式に乗って、こ、気付イ一行のかたあ？私なんか、やっぱり、ちょっと、前に私は思ってもいなかったけど、四日ぶり等日はっ、だからやっぱ日ぶ今日は毎日のハスストちゃの。そうすると次がまとは見ぶ捉まるんですね。だからちょっと時間は1日ないっていうの、そのないっ、のシアスこの自分っていうものは自分っていうのは、ずっと、ずっと、ずっと